

チ ョ ー サ ー の 複 合 に 関 す る 覚 え 書 (Ⅲ)

及 川 典 巳

0. ME のある一つの語について外来語であるか否かの疑いは言語のあいだの干渉を記述しようという考えから惹起されるものにちがいはない。だが、それはまた、当時の人間が向かいあっていた言語上の現実というものを、またその混乱や対処のための工夫というものを見定めようとする思いからでもある¹⁾。ノーマン・コンクエストとともに始まった ME におけるフランス語使用という実状は、後世の諸説の紛糾をよそにして²⁾、かなり長びいたと言ってもよい。Helen Suggett の研究は仏語使用の最盛期というものが 1369 年から 1384 年にかけてであった、ということのをわれわれに教えている³⁾。もしそうであるとするならば、それに伴った混乱や工夫の必要が当時の社会の各層に長くうちつづいたということにもなるであろう。J. Orr は、チ ョ ー サ ー (Geoffrey Chaucer, ? 1340-1400) の『ばら物語』(*The Romaunt of the Rose*) という翻訳や『キャンタベリー物語』の作品の一節に表現のあやまちを二三指摘して、中世という時代きっての知識人だったこの詩人にさえ、この種の混乱があったことを認めている⁴⁾。しかし、これらのあやまちはたんにひとりの身に起こる失錯だったのか。それは時代の通弊というものではなかったのか。むしろ二言語併用たけなわの一時期にたまたま筆をとろうとしたひとりの中世人にしてみれば、ひとつの免れえない宿命だったとも考えられるのである。

以下に試みようとすることも、チ ョ ー サ ー の 複 合 に フ ラ ン ス 語 が い か な る 影 響 を 及 ぼ し た か、という一連の考察である。そして試論という名においてもしこれらに許されるところがあるならば、チ ョ ー サ ー にも 混 乱 に 似 た 事 情 が あ っ た の か、あるいはそれにたいする工夫の何かが彼にあったのか、ということをも多分の想像を交えつつ追求しようとするところであろう。

本稿では、チ ョ ー サ ー の い わ ゆ る 「ラテン系の複合語」⁵⁾ のいくつかを対象に、(1) ME *after-diner* と OF *apres-disner*, (2) 『ばら物語』の *watir-side* と *river-side* などの二

1) cf. John Orr, *Old French and Modern English Idiom* (Oxford: Basil Blackwell, 1962), p. 1.

2) cf. Rolf Berndt, "The Linguistic Situation in England from the Norman Conquest to the Loss of Normandy (1066-1204)", *Approaches to English Historical Linguistics: An Anthology*, ed. Roger Lass (New York: Holt, 1969).

3) H. Suggett, "The Use of French in England in the Later Middle Ages", *Essays in Medieval History*, ed. R. W. Southern (London: Macmillan, 1968), p. 235.

4) John Orr, *op. cit.*, p. 8.

5) Joseph Mersand, *Chaucer's Romance Vocabulary* (1939; rpt. Kenikat Press, 1968), p. 41.

つの章に分け、これらの語を中心に検討を進めることにする。

1. ME AFTER-DINER と OF APRES-DISNER

Dinner, meal, supper などの「食事時間」を表わす語は、たとえばチョーサーから引用する以下の例のように、ME では *after-diner*, *after-mete*, *after-supper* のように使用されている。

At *after-dyner* daun John sobrelly This chapman took apart.

(*Ship T*, VII, 255-6)⁶⁾

At *after-mete* ye ... go se this Damyan.

(*Merch T*, IV, 1921-2)

At *after-soper* file they in trete What somme sholde this maistre gerdon be.

(*Frankl T*, V, 1219-20)

MED によってこれらの語の初例の年代をくらべると⁷⁾, *after-mete* が 1390 年ごろ (写本の推定年代は 1350 年ごろ) とあり, *after-diner*, *-soper* がともにチョーサーであることから, これらはほぼ同じ年代に書記言語に現われたといえる。また ME における用例は, *after-mete* が比較的多く 7 例で, *after-soper* が 3 例, そして *after-diner* が 2 例であり, とくに後者の二語についての用例は Malory の *after-soper* の一例 (a 1470) を除いては, すべてチョーサーの作品にしか起こっていない。

また, 上の引用は, F. N. Robinson の版によっているために, これらの語には複合名詞としてのハイフンがついている。だが, たとえば Skeat の版ではそれぞれ *at-after diner* (*mete, soper*) となっているのである⁸⁾。このように, *at after diner* などの表現は, *after* を複合語の一要素として単独の前置詞とみなすのか, また *at-after* という複合前置詞の一部とみなすのかということから, これまで諸家の意見に一致をみていない, 統語法に関する問題のある表現になっている⁹⁾。

そして, 上述したことなどがこれらの語における背景であり, いってみれば経歴に似た事情である。しかしながら, 問題はこれだけではないであろう。*after-diner* の語についてのみいってみても, たとえば, なぜこの複合語が ME でとくにチョーサーの作品にだけ起こったのか。

これはこの章の主題だが, この語の成立の陰に, フランス語の影響が働いてはいなかったか。そして, これについての暗示として, H. T. Price の言葉はこの場合にも適切である。

6) 本稿における Chaucer の引用は F. N. Robinson (ed.), *The Works of Geoffrey Chaucer*, 2nd ed. (London: Oxford Univ. Press, 1957) によっている。ただし, イタリック体は筆者。

7) MED (s. v. *at Adv & prp*; *after-* prefix, 2; *after-mete* n.)

8) Skeat (1894-7, v, p. 172 n. to B 1445). cf. Robinson (p. 733 n, to VII 255); Baugh (p. 338 n.); Donaldson (p. 334).

9) T. F. Mustanoja, *A Middle English Syntax*, 1 Parts of Speech (Helsinki, 1960), pp. 366-7. 中尾俊夫『英語史 II』英語学大系 9, 大修館書店, 1972, p. 355.

「チャーサーの英語ではフランス生まれのことわざや日用語というものが苦もなく納まっているところがある。それだから、彼が外来語を使っているということがかえって驚いてしまうのだ」と¹⁰⁾。このような驚きと発見は *after-diner* という語の場合にもありうることではないだろうか。

ここでフランス語の対応する語についてみてみよう。*après-diner*, *après-soupée* はそれぞれ15世紀、また前者については *apres-disner* という語形では1490年に初めて書記言語に現われている¹¹⁾。したがって、これらの複合語は15世紀以前にも日常の語として使用されていたと想像できる。

では、問題はこのフランス語がチャーサーの言葉にどんな経路をへて入ったか、ということである。この点についてわれわれの推測を助けてくれるのは、先にその一節を引用した「船乗りの話」(*The Shipman's Tale*) の出典に関しての Robinson の見解である¹²⁾。彼は、この出典は不詳だが、話の道具立て、また語句の一部からおそらくフランスのファブリオーらしいという。だとするならば、出典は不詳であるにせよ、もしあるファブリオーの一節に *after-diner* の原型が存在するとすれば、チャーサーがこの語を耳にし、あるいは目にしたということが仮定できるであろう。そもそもファブリオーという小話というものは11世紀から14世紀にかけてのフランスに流行したものであり、現在残されているもので百五十篇ばかり、またその性格は「民衆的とはいえ、作者はしばしば学僧であり、博識であったし、その聴衆は精緻な長篇物語の聴衆と同じで教養ある宮廷人たちであった」¹³⁾からである。

ここで『三人のせむし』(*Des trois boçus*) というファブリオーの一節を引用する¹⁴⁾。

Et, quant ce vint *après disner*,
Si lor fist li sires doner
Aus trois boçus, ce m'est avis,
Chascun, vint sols de parisis.

ここに *après-disner*, そして *after-diner* のモデルが起こっている。また、上述した *GODEF* の用例よりさらに古い例として。さらにまた、これらの語は、前稿において指摘した *summer's day* の語のように¹⁵⁾、口誦詩に特有な「物語」の発端を告げる表現の一

10) H. T. Price, *Foreign Influences on Middle English*. Contribution to Modern Philology 10 (Ann Arbor: Univ. of Michigan Press, 1947), pp. 1-2.

11) A. Hatzfeld et A. Darmesteter, *Dictionnaire Général de la Langue Française* (s. v. *après-diner* s. m., 1490 *Après-disner*, dans *GODEF. Suppl.*).

12) Robinson, *op. cit.*, 732.

13) V. L. ソーニエ『中世フランス文学』武島栄三・高田勇共訳、クセジュ、白水社、1958, pp. 87-88.

14) R. C. Johnston and D. D. R. Owen (eds.), *Fabliaux*, 2nd ed. (Oxford; Basil Blackwell, 1965), p. 15, ll. 79-83.

15) 筆者「チャーサーの複合に関する覚え書(Ⅱ)」アルテス・リベラレス 12, 1973, p. 14.

部としてかなり頻用されているのである。ただファブリオーという中流階級(町民, 騎士, 司祭, 修道僧)の生活をリアルに描いた「話」では, *summer's day* という語よりも *after-diner* という語の方がより自然だったのであろう。これらの語がファブリオーによく起こる例として次の一節を引用する。

.I. diemanche, *après mangier*,
Sont alé devant lo mostier;
Illuec se sont entretrové.

(*Le meunier et les .ii. clers*, 19-21)¹⁶⁾

これまでチャーサーの *after-diner* という語についてそのモデルとしての OF の *après-disner* の確認, またファブリオーという導入の経路をめぐって推量を重ねてきたわけである。ここで改めてなぜチャーサーの作品に限ってこの語が起こったのかという当初の問題を検討しながら, ME, OF の両語の対応について結論を出してみよう。

たとえば, *after-diner* の同意語といってもよい *after-mete* という語が, 対立するように「商人の話」(*The Merchant's Tale*) に起こっていることに注意してみよう。この複合語は, 先にその例を引用した *après mangier* ともし関係があったとすれば, 在来の要素からできているということからも, かなり意識的に造語された語なのである。また意識的という点で, この「商人の話」は『物語』の中でも傑作のひとつであり, もっとも独創性に富んだものとされているのである。『物語』の中で同じファブリオーの系統には属しながら, 不思議なことに, *after-diner* の現われる「船乗りの話」とはかなり対照的である。それは D. S. Brewer が指摘するように¹⁷⁾, 「商人の話」は真のファブリオーにくらべてもっとも遠ざかり, 一方「船乗りの話」のほうはそれにもっとも近いものであった。もとのファブリオーは, その創意は別として, 形式や文体にとらわれず, ロマンスにくらべると芸術的な洗練さにおいて欠けるところがあったからである。

だが, Brewer のこのような言葉は, イギリスという地に初めてファブリオーをとり入れて, それを一個の芸術作品に完成させたチャーサーという詩人についてのみ言いうることである。チャーサーは「船乗りの話」の制作で, 内容といわず, また語句といわず, すべての点でファブリオーの影響をうけいれて, その真髓に肉薄していったのであろう。この時, 先の Price の言葉をくり返せば, フランス語の *après-diner* という語が「苦もなくチャーサーの言葉の中に納まった」のであり, またこのようにして OF と ME の両語の対応がまったく自然に成立したのではないだろうか。この意味で, *after-diner* という

16) Walter Morris Hart, "The Reeve's Tale", *Sources and Analogues of Chaucer's Canterbury Tales*, eds. W. F. Bryan and Germaine Dempster (New York: The Humanities Press, 1958), p. 126.

17) D. S. Brewer, "The Fabliaux", *Companion to Chaucer Studies*, ed. Beryl Rowland (Toronto: Oxford Univ. Press, 1968), pp. 259-61.

語がこの詩人に独特の語となって作品に起こったとしても何等不思議はないのである。

ここで ME *after-diner* という語についての以上の推定をまとめてみよう。外来語を導入するには一般に二つの主な方法がある。結果から言えば、一つは借用語 (loan words) で、他は翻訳借入 (loan translation) である。しかしながら、影響を与える側と受け入れ側の文化、言語の構造、また受け入れ側の社会や個人の二言語併用の状態によって、これらの二つの方法は複雑に行なわれるのである。とくに ME の場合にはその観察がそれほど容易ではないのである。このような背景を考慮した上で、ここに考察したチョーサーの例についていえば、OF の複合名詞 *apres-disner* をモデルにして、構成要素の一部 *disner* を借用し、他の一部を在来の語 *after* で代用した借用混成語 (loanblends) の例である¹⁸⁾。この例は方法として借用語に等しいものだが、しかし普通の借用語の例が多い ME の語彙の中では珍しいものであり、また ME の複合にたいするフランス語の影響の一面を代表している貴重な例であるといえることができる。

2. 『ばら物語』の WATER-SIDE と RIVER-SIDE

借用 (borrowing) の方面では、これまで述べてきたような *after-diner* という語の例と外形上は類似しているが、それと厳密に区別して混種語 (hybrids) と呼んでいるものがある。その区別の基準になるものは、それらの語の成立の事情から由来するのだが、たとえば、借用される側の方にモデルがあるかどうかということである。この辺から、逆代用 (reverse substitution) とも呼ばれるが¹⁹⁾、複合についていえば、A-B という在来のモデルに借用語 A' が入りこみ、A'-B という新しい語が造られる場合である。そして、影響という点からは、要素のどちらもが在来の語から出来ている複合語とは区別されるべきである。さらにまた、この混種語がある言語に数多く存在するということは、比較的長期にわたる二言語併用がそこに行なわれ、また二言語の同化と融合が無理なく起こった証拠なのである²⁰⁾。

ME におけるこの混種語は語彙の中でも特別な意義をもっているといってもよい。たんに語数ということからだけでなく、それが後の英語にはたす役割の大きさからいっても。この種の語について、従来 O. Jespersen を始めとする英語史家たちが一致して注目しているのは当然のことなのである。たとえば、ノーマン・コンクエストの影響で、ラテン系派生接辞が OE からの接辞と大幅に交替し、それが在来の語幹と自由に結合し、生きた接

18) Einar Haugen, "The Analysis of Linguistic Borrowing", *op. cit.*, ed. Roger Lass, pp. 66-67.

19) Einar Haugen, *op. cit.*, p. 69.

20) cf. Paul Schach, "Hybrid Compounds in Pennsylvania German", *American Speech*, 23 (1948), 121-34.

辞として英語に同化，強い形成力を発揮したことなどである²¹⁾。しかしながら，複合という面での混種語にたいしてはまだ十分な注意が払われていないようである。

ここでこの混種語が ME でどのように用いられていたかについて，(1) *chamber*²²⁾，(2) *maister*²³⁾という二つの語について見てみよう。これらの語は借用時期に差はあるが，そのどちらの語もラテン系の外来語である。

(1) CHAUMBRE (OF *chaumbre*, from L *camera*)

(? a 1200) ¹⁾	<i>Ancr.</i> ²⁾		chaumbre
c 1325	<i>Horn</i>		-wouh
(? c 1350)	<i>Jos. Arim.</i>		-wouh
	<i>Ywain</i>		-flor
(1369)	Chaucer <i>BD</i>		-roof
(c 1380)	<i>Form. A.</i>	paleis-	
(c 1385)	<i>TC 2.</i>		-wal
	<i>TC 4.</i>		-dore
(c 1386)	<i>LGW</i>	dausing-	
(a 1387)	<i>Trev. Higd.</i>		-window
(? c 1390)	<i>Gawain</i>		-dore
(a 1456)	<i>Shirley Death Jas.</i>	withdrauing-	
	<i>Ibid.</i>		-flor
(a 1470)	<i>Malory Wks.</i>		-window

(2) MAISTER (OF *maister* & OE *magister*, from L.)

(? OE)	<i>Lamb. Hom. DD</i>	maister
(c 1250)	<i>Gen. & Ex.</i>	-burg
(? a 1300)	<i>KAlex.</i>	-toun
	<i>Arth. & M.</i>	-gounfainoun
(? c 1300)	<i>Guy</i>	-palays
(c 1330)	<i>7 Sages</i>	-rote
(1340)	<i>Ayenb.</i>	-gate
(c 1385)	Chaucer <i>CT. Kn.</i>	-strete
(c 1386)	<i>LGW</i>	-temple
	<i>LGW</i>	-toun
(c 1395)	<i>CT. Sq.</i>	-tour
(c 1410)	Lovel. <i>Grail</i>	-gate
	<i>Merlin</i>	-chirche
	<i>Ibid.</i>	-cyte
(? a 1439)	<i>Lydg. FP</i>	-streete
(c 1440)	<i>Scrope Othea</i>	-dongeon
(? c 1450)	<i>Merlin</i>	-forteresse

注 1) 数字は作品の制作推定年代，()内のそれは写本の制作年をあらわす。なお，a は以前の年（ただし25年を越えない）を，cは示された年，またはその25年前後をあらわす。

2) 作者・作品の略名については，*MED* によっている。

21) O. Jespersen, *Growth and Structure of the English Language*, Ninth ed. (New York: Doubleday & Co., 1938), pp.109-11. and A. C. Baugh, *A History of the English Language* (London: Routledge & Kegan Paul, 1959²⁾), pp.215-6.

22) *MED* (s. v. *Chaumbre* n. 9)

23) *Ibid.* (s. v. *maister* n. 1. G.)

上の表からも充分推察できるのだが、これにさらに付言をすれば、この表の語は両語における造語の一部をあげたに過ぎないものであり(ちなみに、MED が *master* に関して登録した造語例は、全部をあわせれば 55 例にもなっている)、またこの両語が在来の語といわず、外来語といわず自由に結合しているなど、その活発な形成力というものには、ME における複合能力の衰退という従来の定説をたんなる印象や、迷妄に化してしまうような勢いさえ優にうかがい知れるであろう。さらにまた、この種の複合語が年代的に ME の後半に、また用例として韻文ロマンス、とくにチヨースーの作品に多く起こっていることなども注目してよい。

では、チヨースーという詩人にとってこの混種語とはいったい何であったのか。ここで彼が造語した *river-side* という語の成立を参考に、フランス語の影響に対処した中世人の一つの工夫を見てみよう。

チヨースーがしばしば自国の言葉の詩語の不足に苦慮したことは、彼が詩の行にふと洩らすといったその嘆き²⁴⁾というもので知ることができる。彼にとってもし対処のための工夫という意識的な作業が必要であったとすれば、それは新しい文化や、新しい文学に対応するいくつかの正確な、そして趣のある自国の語を造り出すことであったろう。

以下の引用は、*river-side* という語の起こる『ばら物語』の翻訳とそれに対する原文からの一節である。

Tho gan I walke thorough the mede,
Dounward ay in my pleiyng
The *ryver syde* (costeiyng). (Rom, 132-4)

Lors m'en alai par mi la pree,
Contreual l'eue esbaniant,
Tot le *riuage* costoiant. (RR, 126-8)²⁵⁾

この一節の最後の詩行を前にして、まだ若く、創作の途についたばかりのこの詩人が初めて上にのべた嘆きというものを身に染みるほどの無念さをもって味わったと、想像してまちがいでないであろう。たとえば、フランス語の *riuage* のもっている軽快、かつ優雅なひびきと、その意味をいかに巧みに英語に移植したらよいだろうか。もちろんチヨースーはすでに先輩がやってきたように、あるいは彼自身すでにこの訳業においてしているように、原詩の語をそのまま借用してみてもよかったわけである。この *riuage*²⁶⁾ はすでに 1300 年頃、そして同族の *rive*, *river* とも年代にしてほぼ同じ頃に英語に借用され、

24) *House of Fame*, 1098; *Complaint of Venus*, 80.

25) Ronald Sutherland, *The Romaunt of the Rose and Le Roman de la Rose, A Parallel-Text Edition* (Oxford: Basil Blackwell, 1968), p. 3. ただしイタリック体は筆者。

26) OED (s. v. *rivage*)

彼の友人 Gower も『恋人の告白』(*Confessio Amantis*)において借用しているからである。しかし、彼はそれを拒んだのだ。この時のこの詩人の感懐を J. Mersand はこのように想像している。「もしここで *rivage* を用いたら、この下りはフランス語同然になってしまうのだ。それは改めて英語に適切な言葉がないことを告白することになる」と²⁷⁾。

しかし、ここで、彼に浮んできたものは僅か数行先で自分が造りだしたばかりの *watir-side* という語であつたらう。

The medewe softe, swote and grene,
Beet right on the *watir syde*. (Rom, 128-9)

La prairie grant e bele
Tresqu'au *pié de l'eue* bastoit. (RR, 122-3)

チャーサーは原詩の *pié de l'eue* を *watir-side* という複合語でもって翻訳し、いっぽうこの新しい語をモデルにし、一部は借用語を利用しながら *river-side* を造ったと考えられる。この語の成立はまだ *watir-side* という語の余韻の消えないまでの出来事でもあった。しかし、彼はこの時、またこれらの語の背景に韻文ロマンスの一節を思いだしていなかったであらうか。

His (Horn's) folk he dude abide
Under *wude side*. (King Horn, 1023-4)²⁸⁾

Hye com bi a *forest syde*. (Le Freine, 15)²⁹⁾

This ich quen, Dame Heurodis
Tok to maidens of priis
And went in an underntide
To play bi an *orchard-side*,
To se the floures sprede and spring,
And to here the foules sing. (Sir Orfeo, 63-74)³⁰⁾

上の引用に起こっている *river-side* を始めとする一連の語の性格は要は物語詩における技巧と文体に相応していると言えるであろう。たとえば、森や川は神秘が宿り、人に畏怖の念を抱かせるといったことを強調するためにあるのではなく、貴婦人や、夢見る詩人が遊び、さ迷うためにこそある。しかも、作中人物の行動を平明な、淀みない口誦により聴衆に分かりやすく伝えるには、背景としての状況は、委細をつくして語られなくてはならないのである³¹⁾。そのような意味において、*river-side* などの語は、物語詩の制作に必要な

27) J. Mersand, *op. cit.*, p. 59.

28) W. H. French & C. B. Hale, *Middle English Metrical Romances* (1930; rpt. New York: Russell and Russell, 1964), p. 55.

29) *MED* (s. v. *forest* 3)

30) A. J. Bliss (ed.), *Sir Orfeo* 2nd ed., (Oxford, 1966).

31) P. M. Kean, *Chaucer and the Making of English Poetry: I Love Vision and Devote* (London: Routledge & Kegan Paul, 1972), pp. 6-8.

ものであり、またチャーサーにとっても事情は変らなかったわけである。以下の引用に見るように、*forest-side* などの語は彼の生涯の作品にわたって起こっている。

Whan we came to the *forest syde*,
Every man dide ryght anoon
As to huntynge fil to doon. (BD, 372-4)

Now am I come unto the *wodes syde*;
Maugree youre heed, the cok shal heere abyde.
(NPT, VII, 3411-2)

And in his wey it happed to ryde,
In al this care, under a *forest syde*,
Wher as he saugh upon a daunce go
Of ladies foure and twenty, and yet mo.
(WBT, III, 989-92)

「チャーサーは実際に進んで多くの新しい語を紹介しようとしたわけではないであろう。だが、彼は新語を使用することを決して恐れなかった」と、Brewer は言っている³²⁾。おそらく *river-side* という混種語もそのような新語の例のひとつであろう。さらに、チャーサーがこうした手段により新しく造りだし、また時々作品の傾向から必要とした多くの混種語がある。そのような語の例は Mersand が残している周到なリストによって見ることができる³³⁾。それらの語はチャーサーと同時代の聴衆に始めて与えたような新鮮さをすでに失ってしまっているが、この詩人が造語の際、いかなる語感を示したかということだけは伝えてくれるのである。

最後として注意しなければならないのは、この混種による語形成 (hybrid creation) がチャーサーに限った独特の方法ではないことである。この章の前の方で指摘したようにこの方法は、韻文ロマンスの作者たちがチャーサーと同様に語彙の不足に苦しんだあげくの工夫のひとつだったのである。チャーサーはこの方法を、いわば先人の遺産として受けつぎ、それを展開したとも言えるであろう。

3. 以上において、チャーサーのラテン系の複合語を例にして、複合という語形成におよぼしたフランス語の影響を二つの面から考察してきた。1. では *after-diner* と OF *apres-disner* の対応から、複合における借用混成語 (loanblends) の例を推定し、2. では *river-side* と *water-side* の対応からチャーサーにおける混種語 (hybrids) の成立について略述したわけである。

32) D. S. Brewer (ed.), *The Parliament of Foulys* (New York: Manchester Univ. Press, 1972), p. 15.

33) J. Mersand, *op. cit.*, pp. 159-73.